

もっとボクは
カノジョの
モノ

天戸祐輝

表紙イラスト：鈴音れな

試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『もっとボクはカノジョのモノ』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ぶち文庫『ボクはカノジョのモノ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



もっとボクは
カノジョのモノ

天戸祐輝

表紙 / 鈴音れな

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ことさわ ふと
琴沢 歩斗

両親が共働きのため幼い頃から隣にすむ一つ年上の音麗といることが多く、いつの間にか彼女を意識し始めていた。そして、ついに彼女と結ばれるのだが——!?

は き はね ねい
葉姫羽 音麗

歩斗の隣に住む美少女。優しくも自由奔放な性格で、学園では男女問わず人気がある。歩斗以外には隠しているが、趣味は格闘技で、よく歩斗を実験台に技の研究をする。

いつもなら辛く感じる朝。

なのだが、本日の歩斗は機嫌よさそうに、鼻歌まで歌いながら登校していた。

「むふふっ。今日はなんて素晴らしい朝なんだっ！」

彼と同じく登校している学園生たちが、一斉に不審な目で見てきた。

まわりとは違う浮いた存在。

下手をすれば、完全に変質者である。

「オッス琴沢、どうかしたのかっ？」

「いや、別になんでもねえよ。ぐふふふっ」

怪しい行動の歩斗にクラスメイトが声をかけてきたが、まったく気にならない。

それほどまでに、今の彼は機嫌がいい。

昨日、小さい頃からずっと好きだった幼馴染みで、一つ年上の音麗と恋人関係になれた
だけではなく、初体験までしてしまったのだ。

しかも、初めてのエッチだというのに膣内射精までしてしまい、そのあと何度も彼女を
抱いてしまった。

自由奔放な美少女で、学園でも人気ナンバーワンな音麗を恋人にした幸福に、今にも「音
麗は俺の彼女だっ！」と叫びたい気分だ。

「おまえ、変なクスリなんかやってないよな……」

「んなもん、やってるわけねえだろうが。しかし、今日は最高だっ！」

「ダメだこいつ……」

クラスメイトに呆れられながら校門をくぐった瞬間、幾多の女子に混じり、黒いセミロングの髪を靡かせている背中が見えた。

（音麗っ!?!）

同級生と楽しげに話している彼女を見た瞬間。心臓がドクンツと高鳴り、自然と湧き上がってくる幸福感に、顔全体の筋肉が緩んでいく。

（ダメだな、これじゃ。いつもどおりにしなければっ）

と、今さらながら浮かれている自分を抑え、小走りで彼女に近寄ってみるが……。

「オッス音麗っ、今日も綺麗だねっ！」

つい気持ちが昂り、声が高くなってしまった。しかも、必要のない言葉まで付け加えてしまっている。

「——歩斗っ!?!」

後ろからの呼びかけに、短い赤紫のスカートをフワリと広げて半回転した幼馴染みが、その美貌を真つ赤にさせて見つめてきた。

「あっ……」

困ったような表情で口をパクパクさせているが、まったく言葉になっていない。

「音麗？」

「——っ！」

いつもと違う彼女の態度に、首をかしげた瞬間。

音麗は持っていた鞆を胸に抱き、赤紫のブレザーとブラウスに包まれた胸を隠すように走り去ってしまった。

「すげえ慌て方……。おまえ、葉姫羽センパイになんかしたのか？」

横に居たクラスメイトが不審な目で見てきたが、歩斗は呆然としたまま、校舎に入っていく幼馴染みを見つめることしかできなかった。

※

カチカチカチカチカチカチ……。

（おかしい……）

手に持ったシャーペンを何度も鳴らしながら、歩斗は苛立ったように窓の外を眺めていた。

（なんで今日は来ないんだよっ！）

五本目の芯を机の上に落としながら、つい声に出してしまいそうになる。

昼休みもそろそろ終わりだというのに、いつもなら黙っていても来る音麗が、今日は一度もこの教室に訪れてこない。

やっと恋人になれたのに、まるでフラれてしまったような気分だ。

（昨日あんなに一緒だったのに、一回くらい来てもいいじゃないかっ！）

「おまえ、さつきからカチカチうるさいっ」

苛立つ歩斗に、前の席に座っていたクラスメイトが話しかけてきた。

「そんなにイラついて、やっぱり葉姫羽センパイになにかしたんじゃねえのか？」

「質問拒否」

一言で話を終わらせる。

今は誰とも話す気になれない。

朝の幼馴染みの様子と、まったく顔を見せてこない彼女の態度に、怒りさえ感じている

ほどだ。

「ちよっと行ってくるっ」

「おい、どこ行くんだよ。そろそろ五限目はじまるぜっ！」

とめる友人を無視して教室を飛び出し、音麗の教室に向かっていく。

いつもなら自由奔放な態度で彼女がクラスを訪れるため、彼にとっては初めての行動だ。

意味もなく緊張してしまう。

（なんで俺がっ！）

無性にイラつきながら歩む速度をあげ、階段を上ろうと廊下を曲がった瞬間。

「きゃっ！」

何枚ものプリントを抱えて階段から下りてきた女子と、真正面からぶつかってしまった。
「ごっ、ごめんっ。大丈夫で——っ!？」

慌ててあやまりながら、廊下に尻餅をついている女子を見た途端、言葉が出なくなってしまう。

意気込んで会いに行こうとしていた幼馴染みが、目の前にいるのだ。しかも、ぶつかった拍子に倒れ、少し捲れたスカートから水色と白のストライプショーツが見えている。

「な、音麗……あの……」

床に尻餅をついたままの彼女を見ながら、口ごもってしまった。

彼女に会おうとしてここまで来たのはいいが、なにを話せばいいのか、まったく考えていなかった。

ただ言葉を詰まらせながら、下着を見ないように視線を泳がせるだけで、精一杯になつてしまう。

「歩斗……っ!？」

泳がせた視線に気づいた幼馴染みが、慌ててスカートの裾を直して立ち上がり、真っ赤な顔で見つめてくる。

「あ、あのさ……」

けて聞いてきた。

しかし、うなずくだけで答えることができない。

まだ手で奉仕してもらっているだけだというのに、ペニスが心地よく痺れすぎて、今にも掌を秘孔に見立てて腰を動かしてしまいそうだ。

切っ先から溢れるカウパー液は濃くなってしまう、音麗の綺麗な手をいやらしく汚してしまっている。

「ね、音麗っ。俺もう出ちやいそうだっ」

「で、出ちやいそうってっ!! こんなところで……」

射精を告げる言葉とともに、ビクビクと脈動をはじめた肉幹に、彼女が驚きながらも困惑した表情を向けてきた。

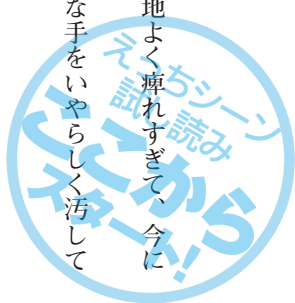
学園の屋上で精液を撒き散らすわけにはいかない。

それに、このまま射精したら音麗の手だけではなく、そのキュートな美貌も制服も白濁液まみれになってしまう。

「が、我慢して、歩斗」

「む、無理……」

彼女の願いに応えようとしてみるが、ペニスから伝わってくる刺激に、頭の中が射精することではいっばいになってしまう。



腰は自然と前後に動きはじめ、肉幹の脈動が早まってくる。

「このままじゃ爆発しちゃうよ。だから、口で……」

「くっ、口ってっ!!」

口内射精という頼みに、幼馴染みが驚きの表情を向けてくる。

「頼むよ、このままじゃ……」

「頼むって言われても……」

フェラの懇願に、彼女が肉幹を抜くのをやめて数秒。

少し照れ笑いを浮かべた幼馴染みが、ペニスを握ったまま黒い瞳を向けてきた。

「し、しようがないなあ……。その代わりに、今度のプロレスの試合、一緒に見に行っても

らうからね」

照れ隠しの交換条件を口にした音麗が、ゆっくりと桜色の唇を開き、カウパー液を溢れ

させる亀頭に被せてくる。

「一緒に見に行ってくれなきゃ、パイルドライバーで校庭に頭を突き刺してあげるから……」

「はむっ」

「くうあっ!!」

膨れていた切っ先が音麗の唇に含まれ、生暖かな空間が亀頭を包んできた感覚に、思わず腰を引いてしまいそうになった。

しかし、音麗はそんな彼の様子など気づかないように小さな唇で肉幹を啜え、震える舌先を肉幹に這わせてくる。

「き、気持ちいいよ、音麗……くっ……」

「んぷあ……ほんと？　なら、もっとしてあげるね……はむっ！　んうっ……ふむう……んんっ……」

一度ペニスから唇を離して嬉しそうな笑みを見せた彼女が、再び肉幹の半分まで口腔に含んで、セミロングの黒髪を前後に揺らしてきた。

初めてのフェラに時々えづきながらも、自分の前で膝をついて口淫をしてくれる幼馴染みの姿に、我慢できない濁流が肉幹に駆け登っていく。

二人しかいない屋上には、音麗のくぐもった息遣いと、ペニスをしゃぶる淫らかな音が流れ、いやがおうにも興奮が増してしまう。

「すっ、すごいいいよ音麗。吸い出されちゃいそうだっ」

「んふあ……んん……んチュパっ……チュル……ほんろ？　なら、もっろシれ、ほんろに歩ろの、吸ひ出ひてあへふ……んチュパっ！」

「くおおっ!？」

肉幹を啜えたまま囁かれた言葉と、上手になってきたフェラに刺激に、ペニス全体が強烈に疼きだしてしまった。

彼女の舌や頬裏が亀頭や肉幹に擦れる度に、肉幹全体が引き攣るように震え、唾液にまみれたペニスが音麗の唇を捲る度に、焦燥的なムズ痒さが股間を直撃してくる。

「くあつ、もう、もうダメだ音麗っ！ 音麗……音麗っ！」

「んんっ……ぢゅぱっ……ろうひっ!? んううっ！ んっ、んっ、んんっ！」

肉幹を痺れさせてくる射精直前の痺れに、歩斗は思わず彼女の頭を抱え込み、腰を前後に動かしてはじめてしまった。

乱暴にははいけないと分かっている、ペニスは激しく彼女の唇を捲り返し、根元まで挿入して喉奥を突き刺してしまう。

「んううっ！ んんっ、歩斗……、出ひふえ……出ふいれいひよ……んぷっ」

潤んだ瞳を向けてきた音麗の姿に、もう射精を抑えることができない。

腰は何度も前後してしまい、彼女の口腔で暴れる切っ先が頬裏や上あごを激しく擦って、荒々しく喉奥を突き刺していく。

肉幹には塊のような濁液が何度も登り、切っ先を大きく膨らませながら痺れはじめてしまった。

「くああつ！ 音麗っ、音麗っ、ね……くうううううっ!!」

「んぷううっ、んぷっ、んっんっんっ、んちゅぷううっ!! んぷうううううううううううううう——っッっ！」

「んあっ、入って……歩斗がまた……ひゃんんんんんんんんんんんッ！」
 一気にペニスの根元まで差し込み、駆弁のような体勢で幼馴染みの胎内を埋め尽くして、切っ先を子宮口に突き当てていく。

処女と変わらないきつさの膣内は、待ち望んでいたように幾枚もの膣襞をペニスに絡ませ、無数の膣粒を龟头と肉幹に擦りつけてきた。

「くうっ、絡まって……動くっ、動くよっ！」

「ひゃうッ……そんな……はふッ、ンああッ！」

きつい膣内と絡まってくる膣襞の刺激に、ペニス全体がムズムズと痺れていく。

彼女のお尻に回していた両手は、自然と愛液にまみれた両太腿を抱えるように持ち上げ、本格的な駆弁体位で秘孔を突き上げはじめてしまった。

腰が動き、ペニスが秘孔を捲り返してピストンする度に、音麗の肢体を押しつけている金網がガシャガシャと鳴り、濡れた嬌声が学園の屋上に広がっていく。

「んあッ……見られちゃう……歩斗が入つてるとこ全部……全部見られ……はふッ！」

もし下に居る誰かが気づけば、下着だけでなく秘孔にペニスが入っているとところまで丸見えの状態だ。しかし、その背德的な緊張感が、より彼女を興奮させていた。

秘孔を突き上げる度に逆ハート型のお尻が迎えるように動き、子宮口に切っ先を押し当てると、細腰が淫らにくねって膣全体でペニスを締めつけてくる。

堪えていた声は、もう止められなくなったように何度も喘ぎ、二つの肉果実が何度も上下に弾んでいる。

「気持ちいいよ音麗っ。アソコも……このおっぱいも……くちゅ」

「ンあああッ！ あふッ、む……胸まで……ひゃふッ！ も、もうがまんできない。もつと歩斗の好きなようにして……もつと奥まで突き上げてッ！」

秘孔を突き上げながら乳芽にしゃぶりついた途端。快楽に耐えられなくなった彼女が自ら両脚を広げ、ペニスを根元まで迎えて子宮口を亀頭に被せてきた。

柔らかいゴム輪のような子宮口にはまり込んだ切っ先には、今にも射精してしまいそうなるムズ痒さが走り、歩斗をセックスの快楽にのめり込ませていく。

（くっ、まだ……もつと感じさせてからじゃないと……）

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ……。

「あふッ、ひゃあッ……あッ……え？ どうして……」

今にも射精してしまいそうな肉幹の疼きを堪えながら、子宮口に切っ先をはめ込んで腰の動きを止めた途端、彼女が切なそうな瞳で見つめてきた。

「もつと音麗を感じさせたいんだ、だから……」

「えっ!? ちよっ……歩斗、こんな……きゃんッ!?」

戸惑う彼女を強引に動かし、腰をお尻に叩きつけやすい立ちバックの体位に変更させて、

音麗の両手をフェンスに押しつけた瞬間。短い悲鳴をあげた彼女が、恥ずかしげな表情で振り返ってくる。

「だ、ダメ……ほんとに見られちゃう……エッチしてるとこみんなに……」

運動部が練習をしているグラウンドに、汗ばんだお椀型の肉果実を向けたことで、羞恥の興奮を増した彼女の膣が、今までよりも強くペニスを締めつけてきた。

緊張と羞恥に反応した膣壁は、何度も肉幹に襞を絡ませて蠕動し、切っ先をはめ込んだ子宮口が、精液を求めるように鈴口を吸いまくってくる。

頭の中は、もう彼女の膣内に射精することしか考えられなくなり、学園の屋上にパシッパシッと肉のぶつかり合う音が響きはじめてしまう。

「もう音麗は俺だけのもんだ。絶対に誰にも渡さないっ！」

「ふうああッ！　こんなに激しくッ……ひゃうう！」

ガシャガシャとフェンスを鳴らしながら、背後から音麗の両胸を鷲掴みにして揉んだ途端。秘孔とペニスの隙間からコブツと濃い愛液が溢れはじめた。

内腿筋を浮き上がらせた彼女の太腿は、上から伝ってくる愛液で艶めかしく濡れ光り、紺のハイソックスにまで染み込んだ蜜腋が、上履きの底からジワジワと染み出している。

「また中に出すからっ。音麗の中、俺のでいっぱいにさせるからなっ」

「はふッ！　んあッ……中つて……はあはあ……いいよ歩斗……いっぱい……わたしの

中、歩斗でいっぱいにしてえええッ！」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

もう絶頂することしか考えられない。

叩きつけている腰で彼女のお尻は赤くなってしまい、ペニスをピストンさせる度に、捲れ返る秘孔から大量の愛液が吹き出してくる。

射精を堪えているペニスは、ジンジンとした痛みさえ感じてしまい、ヒクヒクと膣が蠕動して幾枚もの襞が絡みついてくる度に、切っ先から吹き出した先液が音麗の膣内に染み込んでいく。

「ひゃんんッ！ もう……もうダメッ！ もう見られたっ方がいいッ！ だから早く……早くイッて歩斗ッ！ もうわたしギブアップだから……もうわたし限界だからあああああああああッ！」

絶頂寸前になった幼馴染みが、突然甲高い声で喘ぎながら逆ハート型のお尻を左右に振り乱し、今までより強い膣圧でペニス全体を締めつけてきた。

膣襞は、まるで別の生き物にでもなったようにピツタリと肉幹に絡みつき、エラ裏にまで絡まって、強烈なムズ痒さでペニス全体を刺激してくる。

秘孔と子宮口は、ペニスが千切れてしまいそうな締めつけで亀頭と根元を喰い締め、精液を求める子宮が、口淫でもするように切っ先に吸いついてきた。

「くうおおおつ、音麗っ、音麗っ！」

ペニスから伝わってくる痛くもムズ痒い痺れに、もう腰が止まらない。

肉幹は吸いついてくる秘孔を何度も捲り返して膣内を掻き回し、子宮口が緩んでしまうほど亀頭をはめ込んで、子宮内にまで切っ先を突き刺していく。

両手は肉果実が潰れてしまうほど指を喰い込ませて荒々しく揉み、指の間で転がす尖った乳芽を、フェンスにまで擦りつけて音麗を感じさせてしまう。

屋上の床には、彼女の秘孔から飛沫した愛液が水溜りとなって広がり、水鏡のようになって二人の接合部を真下から映してきた。

「はふッ、あッ……くうんんッ！ わたしもう……もうイク……はふッ！ 歩斗も……歩斗も一緒にッ！」

「出すよっ、音麗の中にいっばい出すからっ！」

ジュリュッ！ ジュプッジュプッジュプッ！ ジュププッ！

校庭どころか、学園全体に聞こえてしまうとほど淫らな挿入音が鳴り響き、音麗の喘ぎ声がどんどん大きくなっていく。

ペニスは彼女の膣内で太さを増しながら何度も脈打ち、肉幹の内部に塊のような濁液が登って、子宮口を突き刺す亀頭を膨らませはじめた。

「くおっ！ もう出るっ……でっ……くうううっ！」

「んあッ、あッあッあッ、ふああッ！　きてッ、歩斗のいっばい……いっばいわたしの中
にきてえええッ!!」

びゆるるっ！　びゅぷっ……びゆるびゆるびゆるびゆるびゆるるるッッッ！

「ふあああッ！　熱いッ……熱いのがまた中にッ！　歩斗ッ……歩斗おおおおおお
おおお——ッつッ！　ッ!!」

プシュッ！　プシユウウウウウウウウウウウウ……。

ペニスが溶けてしまうような焦燥的な痛疼きとともに、肉幹の根元まで秘孔に押し込
んで龟头を子宮口にはめ込んだ瞬間。痛みさえ感じる放出感とともに、大量の精液が彼女の
子宮内に飛び散りはじめてしまった。

子宮壁に直接精液がへばりつく感触に、音麗も背中を仰け反らせて絶頂し、両胸をフェ
ンスに押しつけながら甲高い嬌声を張り上げている。

絶頂にヒクヒクとする秘孔と子宮口は、肉幹を潰してしまうほど強烈なきつさで締めつ
け、激しく蠕動する膈壁が、ペニスを根元から引き抜くほど奥へとうねって抜き立ててくる。
ビュクビュクと子宮内に飛び散っていく精液に答えるように、幼馴染みの小さな尿道か
らは潮まで吹き出し、淫唇に引っ掛けていた白ショーツをビチャビチャに濡らしながら、
漏らしたように滴って屋上の床の水溜りを広げはじめた。

「くああっ！　すごいよ音麗っ、俺の全部……全部が出ていくみたいだっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>